

大興安嶺を越えての避難行

—大場昭蔵さんの語る満洲引き揚げ体験—

新保 敦子

はじめに

大場昭蔵さんは、1944年に満洲国とソ連との国境近くの三河地方にご家族と一緒に移住し、敗戦に伴い、大興安嶺を越えて奇跡的に生還したというご経験の持ち主である。三河開拓団（三河共同開拓組合，第二次興安義勇隊開拓団）の避難行に参加した総員427名は、一人の死亡者もなく、43日間約800キロの道のり（三河～嫩江）を踏破した。大興安嶺は、山岳地帯（最高峰約1500メートル）が続いており、犠牲者を出さなかったことは、極めて特殊な事例と考えて良いであろう。

大場昭蔵さんの父上である大場卓蔵氏は、山形県長井村出身で、1944年に出国して1946年に長井村に帰還するまで、357日間4600キロの過程を日記に残しておられる。敗戦に伴う混乱と苦難の逃避行の間であっても、毎日、日記を書き続けられたこと、日記を持ち帰ってこられたことは特筆すべきであろう。「どんなことがあっても、これだけは持ち帰る」という強い決意の下、リュックサックの底を二重にして保管されてきたという（『北海道新聞』，2020年12月19日）。

大場昭蔵さんは、父・卓蔵氏の日記を整理して、『日記 興安嶺を越えて』（大場昭蔵編，1975年）を自費出版されておられる。敗戦前後の逃避行，収容所の実態を知る上で、貴重な第一次資料である。

大場昭蔵さんは、その後、『めまんべつ通信』（1988年～）『しらぬか通信』（2008年～）『さっぽろ通信』（2019年～）というはがき通信の形で、四季折々に感じたこと考えたことをはがき1枚に書き、継続的に知人に郵送されておられる（最新号は、『さっぽろ通信』568号，2023年1月）。その中には、引き揚げ体験や戦争体験に関する記述も少なからずある。大場昭蔵さんが、引き揚げ体験を記録し、客観的な事実や資料で裏付ける作業を地道にされてこられたという意味でも、敬服に値する。

本稿は、大場昭蔵さんの講演の記録を整理したものである。講演は、東洋文化研究会（代表・細川呉港）の主催で実施された（テーマ：大興安嶺を越えて—1945年8月，ソ連参戦による満洲三河住民427名，大興安嶺800キロ逃避行の記録・大場卓蔵日記全記録，善隣協会会議室，2019年

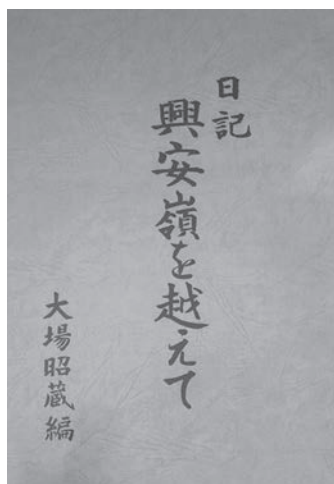


写真1 大場昭蔵編『日記 興安嶺を越えて』



写真2 めまんべつ通信

5月18日)。本講演は、大場卓蔵氏の40日間の日記をもとに語られている。

大場さんによれば、大興安嶺の頂上を越えたのは、三河住民427人、馬車70台、また食料や機動力として連行した牛馬は130頭（興安開拓団長・梅川忠による）である。中国人・朝鮮人の国境警察隊員、ロシア人御者なども含まれていた（『しらぬか通信』436）。

大場さんが講演時に配布した資料によれば、「私にとっての大興安嶺越えの思い出は、指揮する国境警察隊員の怒鳴り声と朝晩の点呼、そして森林にこだまする、食料とした牛の屠殺の銃声でした」という。

大興安嶺を越えての逃避行については、すでに大場さんが、『めまんべつ通信・中国発』などの形で、発表されておられる。また、大場卓蔵氏の日記を資料として参照して、出版された本も少なくない（岡部勇雄『三河その青春の碑』（1976年）、吉田知子『大興安嶺死の八百キロ』（1979年、新潮社））。

しかし、引き揚げ体験を語ることができる方は、高齢化に伴い極めて少なくなっており、大場さんが直接に語られたことばを文字化しておきたいと思い、本稿で紹介するものである。大場さんは、当時のご自身の記憶だけではなく、三河からの引き揚げ体験者を数十年にわたって丹念に訪ね歩き、多くの資料を収集されており、講演においても事実の裏付けをしながら語られている。その意味でも、歴史的な価値があるのではなかろうか。

講演の記録化にあたっては、ご本人のご了解を得ており、原稿に目を通して頂いた。整理については、基本的に講演会の場で語られた言葉をそのまま文字起こしする形で行っている。ただし、一部、読みやすさを考えて修正をほどこした部分や、文字数の制限から省略した箇所もある。固有名詞などは、『めまんべつ通信』、『しらぬか通信』、『さっぽろ通信』、その他、ご恵贈下さった資料（2022年9月1日、札幌でのご自宅にて）を参照した。

1. 三河移住までの経緯

私は、大場昭蔵と申します。昭和7年の2月の生まれで、87歳になりました。北海道からここまで（会場の東京まで）は大変なことです、子どもたち、孫たちも協力してくれて、そんな応援団の中でようやく実現しました。

今日の表題は、「大興安嶺を越えて」ということです。今日は、5月18日ですね。私は生まれが山形県長井ですが、一家4人で満洲開拓に行ったのが、昭和19年の5月17日です。ですから、ちょうどその日の晩に山形から汽車に乗って、5月18日に上野駅にきたような記憶があります。それから、京都に行つてね。

そのとき、戦争が激しくなつて、自分の職業だけでは生活できないということで、商売を替えるという転業開拓団という名前で、満洲に相当な数の人たちが渡ったんです。その山形県の転業開拓団の方たち（70名ほど）と一緒に私は満洲に渡りました。

そもそも私の家は農業をやつていまして、何不自由なく暮らしていたんです。畑も水田も、6反5畝、その他に畑が2反ぐらい。合わせて8反5畝ぐらいの田畑があつて、当時で言えば中ぐらいの農家だったんですね。

何も生活が苦しくないのに、なぜ満洲に行ったのか。皆さんの所に配布されている、「私が満洲移民を決意するまで」という文章があると思います。それは私の父が書いた満洲に対する決断の内容です。

一口に言いますと、満洲開拓が日本の十大国策で、国を挙げての満洲開拓に共鳴して行きました。でも考えてみますと、人間、そんなに国のためということで自分の人生の方向を変えられるものだろうか、大義は「国家のために満洲」、だけどそんなことは本当にあるのだろうか、という疑問をずっと持っております。そして、ようやくたどり着いた原因は、私にあったように思います。その



写真3 大場昭蔵さんの講演（2019年5月18日）

ことについてはまた後でお話ししたいと思います。

私には、大正13年生まれの方がおります。その方が、満蒙開拓義勇軍制度の第2次で、昭和14年に満洲に渡って、満洲の一番西、北の果ての、三河の興安訓練所に入って、訓練に励んでいました。そんな兄の家族という手づるで、満洲国に行ったわけです。

それで、ハルビンから始まって、チチハル、大興安嶺という山を越えて、ハイラルのほうに鉄道で行くわけです。

このハイラルから、192キロ行った奥が私たちの兄の入っていた興安訓練所の場所です。ここは、満洲国の行政名では、興安北省東額旗となっています。旗は県とか、郡とかそういうものの中間ぐらいに当たります。そしてこの東額旗は、別名、三河地方といわれている所です。三河というのは三つの河ということで、ガン河、真ん中のデルブール河、国境の近くのハウル河。この三つの河が、アルグン河という満洲とソ連の国境の河に、北緯50度20分付近で一斉に合流するんです。この3つの河の流域を三河地方といいます。この辺一帯は、ほとんど人が住んでない所で、そこに、1917年のロシア革命のときに、ロシア皇帝側のロシア人農民たち8000名くらいが、国境を越えて堂々と入ってきたんですね。そして、三河地方のほとんどの原野地帯に約22個の集落をつくって、ロシア農業をそこで行っていたわけです。

戦前、ロシア人というのは、日本から見れば西洋の窓口です。都会では、ハルビンが西洋の窓口で、6万か7万人ぐらい亡命して住んでいました。農村では三河地方が西洋の窓口でした（『都会のハルビン、農村の三河』と言われマスコミにも紹介されていた。大場氏、講演会配布資料）。

三河は寒い所で、どれぐらい寒いのかというと、これは昭和16年の1月1日から2月16日までの46日間の記録（興安訓練所の気象観測班が記録した記録、福島県、金澤清さん提供）を見ますと、最高と最低の寒暖計で、一番寒いのが昭和16年1月25日の零下57度。考えられますか、57度。そして最高が零下17度なんです。日中の最高が零下17度。このぐらい、寒い所だったんです。

これ、私の父が書いた私が入ったうちなんです。この赤い部分はまだできていなかったんです。そして、屋根裏にはこれぐらい30センチぐらい馬ふんを敷いて。それから家の周りはずっと、馬ふんを積み重ねて、崩れないようにして、どどめをしました。ガラスはもちろん二重窓で、ガラスの間にはおがくずを、曇らないようにするために入れたそうです。

それから屋根は長さ1メートル50センチもなかったですね。松丸太を縦割りしたものを屋根にトタンのように敷いて、雨漏りを防ぎました。この丸い丸太から、端、狭い部分を出ないように縦割りする秘伝があるんだそうです。それは日本人にもロシア人もできず、できるのは何人かの中国人でした。

むこうに行っての生活の仕方というのは、主食のコメが全然とれないので、生活は全部パン食でした。開拓団でとれた小麦で製粉をして、ロシア人からパンの焼き方を習って、パン食。味噌も醤油もないので、ロシアの料理、ピロシキとか、食生活はまるっきりロシアの食生活でした。

満洲の三河には学校がないので、私は5月に行きましたが、遊んでいました。6月の何日かに、

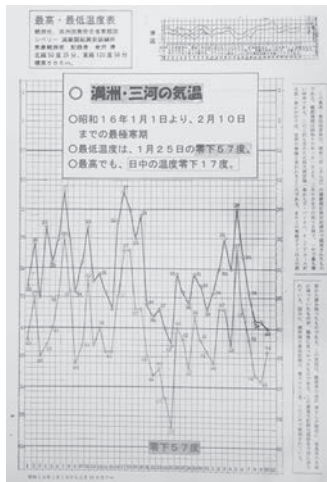


写真4 三河の気温



写真5 大場卓蔵氏が描いた開拓地の自宅

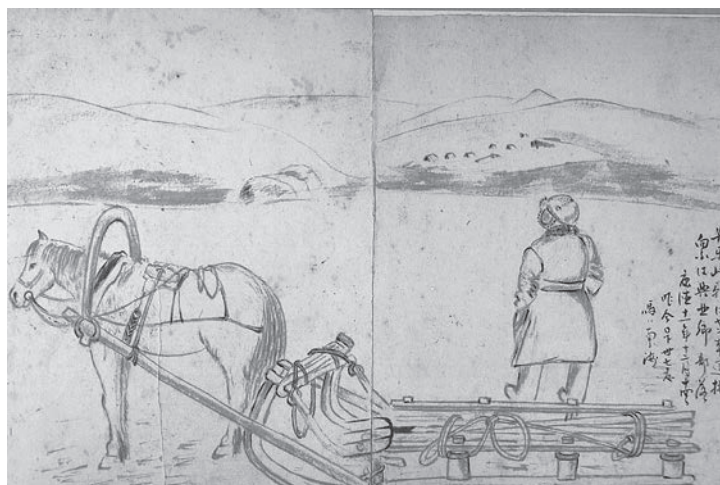


写真6 大場卓蔵氏が描いた画帳から（満洲からの持ち帰り品）

私は綿羊係になったという記事が父の日記にあるんです。当時、開拓団は、兵役に召集され、どんどん人が減ってくる中で手が回らないということで、私がそのような役を仰せつかったのかなと、そんな風にもいえます。

そして毎日の生活は学校にも行かないで、牛や馬の世話、モンゴル馬にも乗れるようになったし、乳搾りもできるようになったということで、つらいということを私は考えなかったです。

学校ができたのは9月になってからです。三河地方の中心地がナラムトで役所や小学校（ナラムト在満国民学校）があるんですね。その小学校の分校ということで、イケン河という河のそばの水車小屋に学校ができて（ナラムト在満国民学校三河分校）、そこで勉強をしたんです（『めまんべつ通信・中国発』62）。

生徒は私の他に、隣町から一緒に行った人3名で、私も含めて4人だけでした。

ところがそういう田舎の学校ですから、勉強のできる子はいない。それで父が、私の将来をいろいろ心配しました。南満洲の公主嶺という町にちょっとした有名な農事試験場があり、そこに公主嶺農学校があったんです。それで、「昭蔵、おまえはしっかり勉強して、公主嶺の農学校に行くんだよ」と父に、こんこんと言われました。そして私は分校から、昭和20年の4月にハイラルの小学校に転校していったわけです。

2. 避難の開始

(1) 緊急の避難

昭和20年の8月9日にソ連が満洲に攻め込んできたんですが、11カ所が主な侵攻ルートです。その11カ所のうちのひとつが三河なんです。三河に入ってきてても、こんな田舎の開拓団に来るわけではなくて、目的はハイラル。ハイラルは西部方面の軍都といわれているぐらい、当時、住民よりも日本の軍隊のほうが多いような町だった。

8月9日の日、ちょうどお昼過ぎだったんですけど、食事が済んでから、牛や馬を飼っている牧場のほうに歩いて行ったんです。そうしたら向こうから開拓団の団長さん（梅川忠団長）がそばに来て、私に、「昭蔵君、この紙を持って、隣の開拓団（三河共同農村）に行ってくれないか」と言われたので、私は愛馬の満福（まんぷく）に乗って伝令に走りました。満福は、いつも腹が膨れていたんですが、非常におとなしい馬で乗りやすかったのです。

そのときの紙切れは、ソ連と戦争が始まったので、夕方までに10日間の食糧と身の回りの品を持って大至急集まれというような内容でした。それが私にとってソ連が侵攻した第一報なんです。

その日、三河地方の日本人、ウエルフクリーの日本人の警察隊、そういう人たちが、私たちの開拓団に集まってきたんですね。こちらの開拓団がある本部の所は別名、興西郷という名前も付いて



写真7 三河地図 西原征夫『全記録ハルビン特務機関 関東軍情報部の軌跡』, 117頁

いたが、興西郷の部落の、ある1軒の家に、人々が全部集まってきたんです。そして、万一、攻めてきたらどうするのかということで、警察隊の方がいろいろと状況説明した。ソ連軍はハイラルを目指して行くわけですから、私たちは逃げるとか、避難をする気はないんですね。それでも結局は大興安嶺に向かって、山の中に入ったということなんです。

実は昭和20年の4月に、興蒙対策という名称で、行政のトップの参事官の方が、新任の参事官に、参事官だけの秘密の専権事項として、万一の場合、開拓団に住民を避難させ、牛馬をつれて興安嶺を越えてチチハルを目指すことを、伝えてはいたようです。

でも、大興安嶺を越えていくなんてことはまず考えられなかったんでしょね。大興安嶺は当時、本当に鉄壁というか、北海道ぐらいの面積の中に、部落というのは全くないんですよ。国境のアルゲン河といった所にも、人が全然住んでない。いるのは狩猟民族のオロチョン民族だったですね。道もない、何もない所をどうやって避難するのかということ、国境警察隊の方といろいろ相談をして、どうしても興安嶺を越えていかないと生き延びる道はないんだということで、興安嶺を越えていくことになった。

最初避難した場所は、シュリケンで、オロチョンが住んでおり、オロチョンの交易所（満洲畜産オロチョン交易所）でした。ハイラルにあった関東軍の特務機関の分遣所がハイラルのちょっと手前のヤケイシ（ヤケーシー、牙克石）という所にあり、ヤケイシのさらに分駐所がシュリケンだったんですね。ですからここにはオロチョンの人とか、特務機関の方（鈴木瑞穂大尉）がおられたようです。まずシュリケン目指してということで、開拓団の一番奥の部落に移ったんです。

（2）集団自決の回避

実は大事なことが一つあり、皆さんにお話ししたいと思います。8月9日に開拓団、大体150名ぐらいがあちこちから集まってきたんです。そのときに、国境警察隊のナラムト避難部隊（大半が婦女子）の指揮にあたり引率してきた幹部隊員の方が、集団自決の方法を具体的に説明しはじめたそうです。私はそこにおりませんでしたが、引き金を銃口に当てて、そして喉に当てて、足で引き金を引いて、もし死に切れなかったら銃で撃ってもらうとか。そういう集団自決の話をされたんですね。

ところが、そのときに、ソ連軍が入っていないのに、そんなこと、ちょっと早いんじゃないかということで反対ののろしを上げたのが、満洲拓殖公社ハイラル出張所所長の小池平弥さん（当時55歳）だったそうです（『めまんべつ通信』395）。

当時は、今の時代の警察と住民とのそんな関係ではなくて、警察の言うことは絶対命令です。警察の指示に従わないでそんな反対を唱えるというのは、よほどの人でなかったらできなかった。

そんなこともあって集団自決は回避された。そのときの様子を私は全く分らなかったです。私は、自分の家でぐっすり寝ていたんです。父が母に、「昭蔵は、集団で集まりのある所には行かなくていいから、うちに寝せておけ」と言っていて、私はベッドで寝ていたんです。だから集団自決を説

明した緊迫した状況が全然分からなかった。あの場にいないから。26年ぶりに、白井日支雄さんとお会いして、集団の集まりの出来事のことをお聞きしてはじめてわかったのです。でも、そんなこと全然興味がないわけです。それでも、うちに帰ってから私の母に聞いたところ、母もようやく話してくれたんです。そういう恐ろしいことはなかなか話せない話題ですね。

そして「自分では死ねないから、開拓団員の渡部さんに殺してもらうつもりだったんだよ」と、そんなことを腹を割って話してくれたんだね。

あけて8月10日ですね。このままでは危ないからということで、開拓団の一番奥地の興北郷という所に（苦楽峠を越えて）移動したんです。

（3）オロチョン族の道案内

その10日の日に、興北郷に三河地方の大半が集結していたときに、ソ連軍がちょうど、隣の興西郷とか、三河共同農村（三河共同開拓組合）まで入ってきた。大砲の音が聞こえたものです。それで、ここから山の中に入ってしまった。目安は、シュリケンで、そこで警察隊の幹部の方が、大興安嶺を越えるいろいろな準備をしたわけなんです。

そして準備をするといっても、どこをどういうふうに通っていったらいいか、山道ですので分からない感じですね。しかも道路なんか全然ありません。ただオロチョンの馬の道というか、これがあちこちにありました。

それから、方向も全然分からない。それで結局は開拓団に出入りしていたオロチョン族のトーキンボという人と、もう一人（名前は覚えていない）ですが、このオロチョン族の2名の方に道案内を頼んだ。そして、快く引き受けてくれて、あとは興安嶺の頂上までオロチョンの道案内で、（馬の踏み分け道をたどって）避難が開始されたわけなんです。



写真8 トーキンボさん（左の大男） 馬車は避難の時に使ったものと同型

3. 避難の途中で

(1) 渡河、夜の行軍

父は、当時、手帳に日記を付けてたんです。現物は、これです。私は昭和50年に、『日記 興安嶺を越えて』という本を自費出版しました。日記に載っていたのがこの文章。

8月12日にトゥラ河という大きな河を渡ったんです。長さ156キロの相当な大きさの川ですね。今、私の住んでる北海道の釧路川とか、山形県の最上川なんかは大体130キロぐらいですけど。もちろん橋などはどこにもあるわけではないし、馬車ごと川の中に飛び込んで。そして、馬というのは結構、泳ぐんです。馬の足も泳ぐ。馬車ごと泳いで、川を渡ったんですが、割に怖がらなかったんですね。そして、これは当時5歳2カ月だった私の妹が、平成8年に当時を思い出して描いた絵です。絵の上を書いてある文面には「逃避行5歳の記憶 沼地のような所を渡る時、真新しい布団なども捨てられた。クリーム色と藍の、市松模様が鮮明に残っている。ゆっくり流されていく。大人たちは 胸まで 泥水に浸かりながら漕いで歩いた。おぼろ月夜の中 周囲の物音はなかったようなー」と書いてあります。

この中で、(絵を指しながら)これが私のうちの布団なんです。布団の模様は、市松模様ですね。これは、東京オリンピックのエンブレムに決まった。ですから、トラウマに悩んだ人(妹)が、東京オリンピックで布団が戻ってくるというようなことで非常に期待し楽しみにしていたんですけど、残念なことに、去年の5月に沖縄で亡くなりました。

この中に、おぼろ月夜の中、周囲の物音が混ざったようなと書いていたんですよ。おぼろ月夜は、満月でもない、月の晩です。夜は行軍して避難した。実は8月17日に、ソ連の飛行機が飛んできて、そして、機銃掃射があったんです。運よく、湿地帯を越えて、ちょうど松林の中に入ったときだったもんですから死者も出ない。けが人もでなくて。馬が何頭か犠牲になったという程度で。



写真9 妹さんが描いた絵

怖かったですね。山の中でソ連の飛行機が、ただ1機ですけどね、その爆音と機銃の音が恐ろしいところがあって、林の中に潜って、音を聞いていました。

ところが2回目また来たんですよ。2回目のときは、警察官の方が「空襲なんて怖くない、飛行機なんて怖くないよ。1本の太い木の陰からじっと見てれば絶対安全だから」と言うんですよ。それで、私、そうかなと思って、2回目に来たときは、本当の大木の陰からじっと見ていました。そしたら、飛行士の顔が見えたんです。

恐ろしいのは、結局、慣れると駄目なんだね。あれだけ危険なもの、恐ろしくないはずはないんですよ。「物陰に隠れて、大木の陰に隠れて見ていれば絶対安心だから、何ともないよ」と言われて、それが当たり前になって。そういうことも、やっぱり戦争の恐ろしさだと私は思いますね。

その晩は、密林や湿地帯の中を馬車で行軍した。皆さん、夜の行軍ってできますか。夜、山道を歩けますか。歩けるんですよ。それはろうそくを使っただけです。開拓地ですから、電気も何もなく、あるのはランプとろうそくです。ろうそくといっても、小さい細いろうそくではなくて、開拓団で使っているろうそくは、3センチか4センチぐらいある太いろうそくです。ランプぐらいの明るさがあるんです。これは満洲の開拓で使う特別なろうそくだったと今思いますね。ろうそくに火ともして、そして、湿地帯を裸のろうそくで。ちょっとした風防をするから消えません。何も見えないので、ろうそくを頼りに。本当に苦労しました。そして、自分も馬車の御者をしていたのですが（日記8月31日参照）、湿地帯にぬかった他の馬車の引き揚げをしているうちに自分の馬車がどこに行ったか分からなくなってしまって参った（『めまんべつ通信・中国発』）。

（2）食料―犠牲となる牛

それから、食べ物はどうしたのかっていうと、最初、何日間か料理したんですけど、途中からなくなって。8月29日に、本日まで牛のと殺30頭って書いてありますね。これは、開拓団から出て、シュリケンというところで、いろいろ相談した中で、興安嶺越えの食料はどうするかということで、牛を食糧としていこうということで牛を100頭以上、追いながら移動したんです。

牛を殺すときは、眉間をたたけば牛は一遍に倒れるんですけど、ところが実は開拓団の中に当時は牛を殺せる人が誰もいなかったんですよ。なぜかというとみんな兵隊に行っていて、開拓団には成人男子が8名しかいなかった。結局は警察隊員が、拳銃で撃って、牛を殺して、牛の肉を食べながら興安嶺を越えました。

大興安嶺という所はそんなに高い山という地形ではないんです。変化のない、大地がつながっていて、どこが頂上だか全く分からない。

何日ですかね、ある所に行きましたら、オロチョンばかりなんですよ。ここが頂上なんだよと案内の人が説明してくれました。頂上から向こう側は、自分たちの生活範囲ではないから、道案内はここまでで帰るということで、オロチョンの方は帰っていききました（謝礼として小銃、弾丸、開拓団の馬を渡した）。



写真10 9月2日の日記

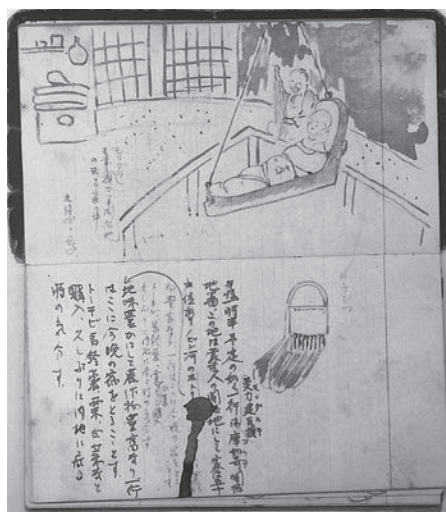


写真11 9月4日の日記

(3) オオカミの声

興安嶺を越える前か越えてからだったか、夜、寝静まってからオオカミが来たんですよ。私は馬車の上で寝てたんですね。赤ん坊のオギャーオギャーという泣き声でしたんですよ。そうしたら、たき火をして一行の不寝番をしていた国境警察隊の人が、「オオカミが来たぞ」ってすごい声で叫んだので、その声でたたき起こされたんです（『しらぬか通信』449）。

開拓団には綿羊がいるから、それこそ文字通り毎日、オオカミを見ない日はないぐらいだった。ところがオオカミの鳴き声を、聞いたことはたったの一度もなかったんです。このとき、初めてオオカミの声を聞いたんです。オーっていうふうにならないんです。違う。オギャーオギャーっていう。赤ん坊の声とそっくりなんですよ。

普通、オオカミの声というのは、犬の遠吠えのような声で、ウオーンというふうにテレビでも放映してます。ところが、開拓団の指導員で、藤田済（わたる）さんという方がおられたんですけど、「オオカミはウオーンなんて鳴かないぞ」、「赤ん坊のように鳴くんだよ」と聞いたことがあります（『しらぬか通信』517）。全く、赤ん坊の声とそっくりなんです。私が日本に帰ってきてから、いろんなときにそういうことを話しても誰も信じないんですよ。テレビで映るオオカミの声は犬の遠吠えと同じですから。

ところが平成21年に、私たちのハイラル小学校の同窓の方（ビクトル古賀氏）に関する『たった独りの引き揚げ隊』（石村博子、角川書店）という本が出たんですよ。この中の91ページに、赤ん坊の泣き声に似たオオカミの声と書いてあるんですよ。私が言ったこととそっくりなんです。それで私、釧路の動物園の方に、学会ではオオカミの声を、どういうふうに表示しているか、手紙を出したことがあるんですよ。やはり、犬の遠吠えと同じなんです。ところが犬の遠吠えがオオカミ

の声というのは、あれは、オオカミが犬の鳴き声をまねしてるということなんだそうですね（藤田 済さん、『しらぬか通信』517号）。その辺は学問的にはどちらが正しいのか分かりません。だけど山奥のオオカミは、あんな犬の鳴き声のような遠吠えのような声では鳴かない。これから究明されていくと思います。

（4）在来種の馬、お産、敗戦を知る

そして、村もない何もない所を、馬車の数、全部で70台ぐらいで避難したんです。馬には在来種と日本馬とがいたんですけど。日本馬は、非常に大きい馬が、一番先にまいりました。在来種は元気でした。しかし、父の書いた日記、9月1日に、きょうから牛に替えたって書いてあるんですね。馬から牛に替え、牛で馬車を引っ張った。大体20日間、馬が馬車を引っ張ったんですね。大変な苦労を馬に与えたのだと思いますね。本当に在来種っていうのは、強い体だと思った。

興安嶺を越える中で、お産もあったんですね。4人の方がお産をしております。そして、赤ん坊は、すぐ亡くなったりして、日本に生還したのは、1名だけ。毎日歩いたり、馬車でガタガタ揺られて行った中で、お産をして、（赤ちゃんも）生き延びたということはすごいことだと思うんですね。

幸子（ユキコ）さんという山形の方（五十嵐君の妻が出産）がたった1人、大興安嶺から山形に引き揚げました。この方が、ぜひ自分の生まれた当時の証拠を見たいということで、北海道の女満別空港に単身で降りて、私のうちに来て、「9月2日に女兒を産む」と書いてある日記の記事を見られたということがありました。

そして今度、部落に入って、いよいよ日本の敗戦を聞くわけです。敗戦を聞いたのは、クルチ（庫如奇・こりき・＜日記＞）です。この場面を読んでみます。「夜、春日中隊長」、これは上庫力（ウエルフクリー）の国境警察の中隊長なんです。長野県の方。「夜、春日中隊長より、男全部召集される。8月15日、日ソ停戦協定。そして、8月20日、関東軍ソ連間に停戦協定成立」と書いてあります。

「8月27日。詔書下り日本民族の存続のため、英米ソ全面的停戦協定となる。嗚呼、大東亜戦争の終滅、昭和20年9月4日。北満の荒野に野宿。星のみさんさんと輝き、冷氣ヒシヒシと身にしむ。12時、1時、2時、小池氏を中心に焚き火の廻りに徹夜す」。こういうものが書いてあったんですね。これは当時の日本人にとって、大変なショックであったわけですね。

春日中隊長は、クルチにあった興安総省のモリダワ（莫力建瓦）旗の旗公署の分駐所で、警察隊から情報が取れたんですね。

（5）武装解除

そして、満洲の行軍は続くわけなんです。そして、9月11日に、興安総省の布西という町の郊外に、青森県からの開拓団（第12次青森鳴沢開拓団）がいたんですね。ようやく日本人と会うこ

とができ、非常に感動しました。

次の日、9月12日、武装解除をソ連軍から受けたんです。開拓団は義勇隊開拓団って言って、小銃とか手榴弾とか武器を持っていますので、その武装解除を受けたんです。そこに我が団の銃、鉄かぶと返納と書いてあってね。その次に、刀剣は、まだよろしいとのことというふうに書いてある。ロシア人に限らず西洋人は、日本人が持った、刀というのは、非常に恐れていたんですね。それで、刀まで取り上げてしまうと、日本人は、何をするか分からないというふうなこと書いてある。それで、刀剣というか刀はよろしい（返納しない）。それを武装解除といえますかね。

そしてさらに今度は、間もなく春日中隊長馬上よりの話で、これよりわれらは布西に向かって進む。布西には日本人、婦女子供30幾名、我等を待っている。布西到着後は単独行動をせず全部一団となって行動すべしとなった。そして、本来の目標がチチハルだったのですが、嫩江（ノンコウ）へ行きなさいということになったんです。

それはなぜかという、これはソ連の組織に原因があったと思うんですね。ソ連軍は西のハイラル方面からザバイカル軍（戦線）が、また北の黒河方面から第2極東方面軍（戦線）が侵攻してきます。嫩江から布西は、第2極東方面軍の第2赤旗軍が占領していきました。そのため、布西で武装解除を受けた三河官民団とナラムト部隊は当然に嫩江への集結を指示されたのでした。チチハルは、ハイラル方面からのザバイカル方面軍の指揮下にありました。組織が違うので、ちょうどこの辺まで来たのかかわらず、チチハルに行けなくて、目的地は嫩江のほうに変えられたわけです。

（6）悲劇のチンバルホ警察隊員

ハイラルから三河に行く途中に、同じ行政区のチンバルホ旗の方々の警察隊も大興安嶺を狙って山越えを果たしたんですね。

このチンバルホ旗のお一人の方が藤本鉄雄さん（『聚霊峯』『めまんべつ通信・中国発』45）という方で、その方がリーダーとなって山越えしました。その方々と偶然に、この大興安嶺の中でお会いしました（日記8月25日、「チンバルキの警官4,5人と会う」）。

ところがこのチンバルホ旗のことで申し上げたいんですが、昭和20年の8月17日に、もう絶望的になって、山の上に行くには子どもはもう全然、連れて行くことができないというところで、24人の子どもを全部、殺したんですよ。自分の子どもでも。24人を殺して、そして残った人たち、大人たちが、この山越えを果たしたんです。

そしてそのときに食糧もほとんどなくなって、（私たちは、牛の肉を食べたりなんかしてしのぐできたんですけど）、その人たちは何もなくて。結局一番、食料になったのはキノコなんだそうです。それからお産をして、もう歩けなくてそのまま置き去りにしてきた人が3人か4人おられる。本当に悲惨な状況であったようです。

そして私、藤本さんに、本当に絶望的になったときに何をしましたかと聞いたことがあるんです。そしたら藤本さんは、『海行かば』を歌っていたというんですね。『海行かば』を歌って元気づけた。

ですから、『海行かば』、あれは万葉集からとったんですよね。日本人の心の中に生きていたのかどうかね。『海行かば』の歌って不思議な歌だなと私、思ったんですよね。ご本人のおっしゃることですから間違いないと思います。

4. 奇跡的な避難行の要因

(1) 避難における明暗

満洲開拓を推し進めた方が結構いらっしゃる。上層部の、何人もいらっしゃるんです。一番最初の頃、まだ治安も何もない時期に始めたのが、東宮鉄男大佐。それからもう一人は満蒙開拓義勇軍制度を作って推し進めた加藤寛治。それから3人目は、満洲の営農面を推し進めた中村孝二郎さんという方。農業のやり方は日本と全く違います。中村さんは、終戦の頃には満洲国立開拓研究所長をやっていた方で、戦後、引き揚げてから北海道の標茶町という所に満洲引き揚げ者（元満洲弥栄開拓団）を入植するために、そこで10年間、暮らしてから、生まれ故郷の東京に帰られた。自分が満洲開拓を推し進めたんだから、最後まで面倒をみるとね。

この方が書かれた本に『原野に生きる―ある開拓者の記録―』という本があります。私、標茶の農協に入って仕事していたときに、この方と2,3回お会いしたことがあるんですよ。『原野に生きる』の中の152ページに、終戦当時の様子が書いてあるんです。退避っていうのは避難することであり、退避行明暗二相ということで、避難に成功したのと、犠牲を払って悲惨な結果に終わったのと、二つ書いてあるんです。その一つの明のほうには私たちの開拓団、三河開拓団のことが出ています。

そして、暗のほうには、黒河というのがあるんですけど、北海道や青森県から入った開拓団がいくつかあるんです。人数が少なくなって、応召されたりなんかして、全部、合併したんですね。そして黒河大青森開拓団ということで、この方々も避難を始めたんです。

この方々は、小興安嶺という山があるんですが、その山を越えてハルビンを目指したんだそうです。ところが、どこをどう行ったらいいのかわからないし、食糧もままならない。オロチョンにも道案内を頼んだんですけどそれも断られて。食料もなくて。山の中で、老人とか子どもさん、歩行できない方、90名をある場所に遺棄した。小屋を建ててここにしばらくいてください、また迎えに来ますからということで、90名を山の中に置いてきましたが、非常に悲惨な結果となりました（全員が餓死といわれている）。ハルビンまでたどり着きましたが、開拓団を出るときは470名いて、ちょうど私たちの人数と同じぐらいなんですけどね（到着時には、170名、『めまんべつ通信・中国発』49、川崎又三郎「大青森郷開拓団避難状況」満洲開拓史刊行会『満洲開拓史』、1966年715頁）。

(2) 三河開拓団が無事に避難できた要因

1) ソ連軍の侵攻

それと比較して私たちがこんなふう到大成功をして、山の中に43日間も、どうして山越えがで

きた、その成功の原因というのが一体どういうことなんだろうかということで、私、まとめたことがあるんです。まず一つは、決定的にソ連軍の入り方が遅かったと私は思いますね。ソ連は、こんな開拓地じゃなくて、ハイラルを目指しました。

2) 初期対策の迅速性、軍隊の援護

それから2番目に、初期対策が非常に早くて、私たちの開拓団員の避難が迅速に行われたということだと思います。そしてここの三河の中心地、ナラモトという所に、満洲208部隊という部隊がいました。その部隊長が団英敬少佐という方なんですが、ソ連と始まったときに、三河の場合は、役所（旗公署）で主な指導者を集めて、諸君たちの生命財産は守るから絶対、安心してくださいというようなことを述べたんだそうです。この団部隊長は、私は非常に偉いと思いますね。そんな部隊長、当時、何人いたんでしょう。それは記憶に残ってますね。（戦後、部隊長ご夫妻が、私たちの北海道までわざわざ来られました）。安心して開拓団が避難できたということだと思います。

それから、開拓団から一番近いガン河のふもと、シロホヤという所があるんですが、そこでソ連軍の騎兵隊と一晚にわたって激戦をやってる。そして、明るくなった頃、激戦が終わったんです。戦争が終わったら戦場処理というか、戦場の掃除というか、そういうことをやるのが国際条約で決まってるんだそうですね。どっちもやらなくちゃならない。ところがソ連の騎兵隊はそのまま死者を残して退去していったと聞いています。家に帰ったりしたのかどうか、よく分かりません。

そのときの戦死者はどれぐらい出たのかというと、ソ連軍が57名、日本軍は18名だったんです。同じような武器で戦った場合、どっちが強いとか、比較するものではないのかもしれないけど。私は、日本軍は決して弱い軍隊ではなかったと、そのとき思いました。大体、同じような武器を使えばどっちもどっちかもしれない。強いとか弱いとかそんなことは言ってはいけないのかもしれないですね。

そのシロホヤの戦闘があったために、ソ連は追ってこなかった。ここで18名の日本軍兵士が戦死して、私たちの後ろ盾となってくれていたと私は思いますね。

3) ロシア型の馬車

これがロシアの普通の馬車です。これとそっくりな馬車で私たちは避難したんです。そしてロシアの馬車というのは四輪車なんですね。四輪車というのは二輪車と比べて馬にかかる負荷が非常に少ないんです。二輪車の場合はちょっとした加減で馬の背中にかかる荷重がどんどん重くなるんです。ロシアの四輪の場合は、馬の背中にかかる負担が少なく、楽だと。

それから、ロシアの馬車の特徴は、曲り木。あれはドガといって、馬車を作るときに、このドガが必要なんです。ドガがあると安定するんですよ。そしてこの両側に馬1頭ずつ。2頭引きはしょっちゅうありますけど、3頭引きは見たことないんです。ドガがあるもんですから固定されて非常にその辺は楽にできる。

ロシアの馬車は四輪車であって、馬車の心棒ですが、木でもできているんです。大興安嶺、越えた私たちの場合は70台のうち大体、半分は木の心棒なんです。木の心棒は、折れても、簡単に作



写真 12 ロシアの四輪馬車

れる。そういう馬車ですね。

この前輪と荷台のところと後ろの車輪が簡単に外せるんです。尖った鉄の棒を1本、差し留めているだけです。前輪と荷台の所ですね。そして非常に小回りが利くという。ロシアの四輪馬車があったから楽に山を越せたということです。

4) オロチョンの協力

それから、先ほど申し上げたようにオロチョンの協力が得られたということです。これは開拓団に当初から10年以上前から何年もずっと出入りしていた方だったんですけど、オロチョンと日本人の交流というのは、普通の生活の中でできた。ある程度、友好的にいこうというのは、三河の開拓団だけだったんです。その他はほとんど関東軍がらみで（杉目昇『関東軍のオロチョン工作と興安嶺を越え退避した日本人の記録』、2003年）、非常にオロチョンにとっては嫌な感じを受けたんだろうし。いろんな方が研究に行き、オロチョンの研究に入ってるんですけど、非常に命令的というか、武力を背景にというか、そういうような感じでオロチョンに接していたものですから、特務機関というか、オロチョンの本当に気持ちというのは、日本人には心を開いていなかったと思いますね。ただ、三河の開拓団だけオロチョンと日本人の交流があったということです。

私の母ですが、満洲の思い出という雑記帳を残しているんです。その中にオロチョンという言葉が何回か出てくるんですよ。これは、特別オロチョンと仲がいいとか悪いとかそういうことじゃなくて、普通の文章で、私の母が書き残したのがあります。

5) 原住民（オロチョン、ロシア）との融和方針

なぜこういうふうな三河の場合、オロチョンと友好的な関係がずっと続いてこれたのか。そして終戦に向けて、なんで興安嶺の頂上まで案内してくれたのか。そういうことをよく原因を考えてみると、三河に満蒙開拓の興安訓練所ができたのは昭和14年なんですよ。そのときに所長とな

られた方が岡部勇雄さんという方（『めまんべつ通信』55）。満洲開拓者の指導員養成所ができたんですね。岡部勇雄さんは、開拓にあたって、まず、現地民との融和、現地民と仲良くなるのが一番大事だと訓練生を訓練しました。その結果が終戦のときに、表れてきたんじゃないのかなと、私はそう思いますね。

訓練生、大体311名のうち250名ぐらいがロシア人の部落（23か所）の各農家に、いわゆる研修ということで行きました。2人か3人だと思んですけど各家庭に分散して、2週間程度、農業などを学ぶために、実習生のような形でロシア人と接触しておりました。

接触するときに、岡部さんは、とにかくロシア人と仲良くって言うように言って、けんかしたりがないように、こんこんと説いてからロシア人の各家に派遣したとも聞いております。

そういうことも含めて終戦のときに、いわゆる原住民と言ってもいいと思うんですけど、ロシア人からの反乱は一遍もないんですよ。

6) 旧教徒の部落であるシロホヤ部落

開拓団に一番近いシロホヤという部落で激戦があって、日本の負傷兵をシロホヤのロシア人が、夜、ソ連軍から目を盗んで山の中につくった中隊本部のほうに馬車で運んでくれたというんですよ。そして別れるときにも土にひざまずいて、十字を切って、ということを部隊長から、直接聞いているんです。これは特殊な場合だと思うんですが。

300年ぐらい前ですか、ロシア正教が分裂したんです。それまでのロシア正教はキリスト教がロシアに行って名前が変わったという正教ですから、キリスト教の中身は変わらないんです。ところが300年ぐらい前に古いしきたりを守るのと、それだけでは駄目だということで新しい宗教を開拓しようということで抗争があって。そして今までの古いしきたりを守るロシアの宗教を旧教徒というんですね（古儀式派、分離派とも呼称）。

シロホヤの部落、これは旧教徒の集落なんです（他はロシア正教の部落）。残念ながらここは人口が少なく、17戸しかなかったんです。私も何回か行きましたが、本当に変わった人たちなんです。祈り方はそこまで私は覚えてないんですけど、野良仕事に行つて畑で寝転がってなんかやっているんですよ。後から分かったんですけど、それが宗教の儀式だったんですね（開拓団が「変人部落」と呼んでいた人々に日本人は助けられた。『めまんべつ通信・中国発』21）。

だけど、先ほど申し上げたように、日本の負傷兵を運んでくれたということは、恐らくそういうロシアの宗教心から出てきたんじゃないのかなと私は今でも思いますね。

7) 反乱をおこさない関係者

それから、三河の警察隊ですね。三河の警察隊のこれ、組織表なんです。この下に中国人、漢民族ですね。中国人と朝鮮人の人たちも、約55名いるんです。それは一緒に興安嶺を越えて、そして日本の敗戦を聞いた晩に、全員、55名の警察隊員、朝鮮系と中国系の人、全部、離れていったんです。決して反乱しなかったんです。岡田好喜さん（大同学院卒業、大同学院6期生「回想録」参照）という方が本隊長だったんですが、岡田さんから、「音もなく離れていったんだよ」と、私

は直接に聞きました。

それからちょうど始まった日に、ロシア人の警察官も 18 名いたんです。ロシア人の警察官というのはもちろん日本の警察隊の一隊員なんですが、昭和 13 年から始まった義務警察官制度でロシア人は 2 年間、兵役というか、国境警察隊に入ることになってたんですね。義務警察官が終戦のときにはちょうど 18 名いたんだそうです。その義務警察官は、武器を置いて、警察隊から離れていった、ということ聞いております。

ですから三河の場合は現地のロシア人とかそういうオロチョンとかそういう方の反乱が一件もなかったんですね。

5. 嫩江にて、伝令の仕事

大興安嶺越えの最終地が嫩江、父の手帳の一番最後に載ってるのが 9 月 21 日ですね。この手帳は、私の母の所に父が置いていったんですね。だから残ったんです。

嫩江についたのが、9 月 21 日で、その夕方に男女別とか、高齢者、子どもに分けられました。父たちは北安に行って、それからみんなと一緒に満洲国の首都、新京のほうに行ったようです。嫩江に残ったのは母と妹と私と、あと開拓団の人たちということですね。ここに嫩江の軍官舎があったんです。これは全部、婦女子で、婦女子収容所になって。ここでちょうど 6 カ月間、越冬したんです。本当に恐怖の中で過ごしましたね。

9 月 21 日から 3 月 21 日まで、丸 6 カ月です。食料なんかあんまりなくてね。最初はここに入れて、コーリャンだけは配給されたんです。(飢餓と寒さと強制使役で) ここで 3900 人のうち 700 人も近い人たちが亡くなったんですよ。もう大変な思いをして。

ここは、ソ連軍の管理下にあったということですね。戦争が始まったときにソ連が入ってきまし

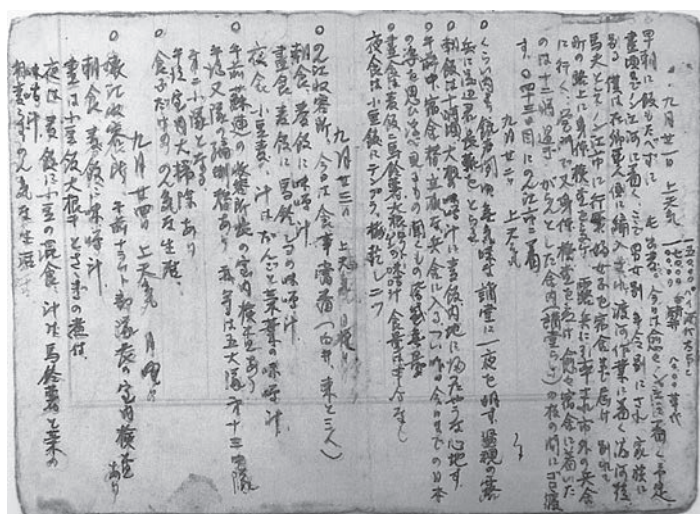


写真 13 9 月 21 日～24 日の日記

たね。そしたらこの軍官舎に住んでいた関東軍の家族の人たちが全部、南下して、チチハルとかハルビンに逃げたんです。がら空になる。そこに私たちが、入ってきた

私、小さいときから体が弱い人間だったんですが、ここに来てから大働きしたんです。伝令です。収容所の中が8中隊というふうに分けられていましたが、その連絡役をやったんです。伝令の腕章が今うちにあるんですけど。これが3名いて、そのうちの1人でした。1名は今も健在です（北見市在住）。

ここが収容所の本部なんですが、隣に日僑管理事務所があるんです。ここにソ連軍の兵隊もおりました（ソ連軍の指揮下で中国人の保安隊が警備にあたっていた）。それから、嫩江県の県公署にソ連の司令部が置かれていて、そのソ連の司令部から命令が出るんです。毎日、いろんな仕事の使役を命じる。

畑に行って馬鈴薯を掘るとか、とにかくいろんな仕事があり、それを強制されるんです。この中で一番、身に染みるのは、昭和21年の1月の婦女子だけのレール撤去作業です。夜に、この嫩江から寧年という所までの181キロぐらいのレールをソ連にもっていくために外したんです（チチハルからソ連国境を結ぶ唯一の鉄道線路、線路の取り外しと犬釘拾い）（西岡てる子『嫩江訓練所史』、648頁）。

この婦女子の絵は昭和28年の出版物に、出てます（『嫩江の悲劇』『秘録・大東亜戦史・満洲編（上）』、富士書苑、218頁）。再版もされてます。そのときの命令に触れ回ったのは私たちなんです。

全部ほとんどが20代で、ご主人がみんな召集されていった人たち。こういう人たちが駆り出されて、いろんな性的な脅迫もあったし、犠牲者も出た（男子でも重労働の作業を女子に、しかも夜間作業をさせるとはいったい何事なのかと、大場さんは怒りを持って『めまんべつ通信』に書いている、374～376号）。

この嫩江に、あけぼのという料理屋さんがあったんです。そこにいた女の方、4名か5名がいた

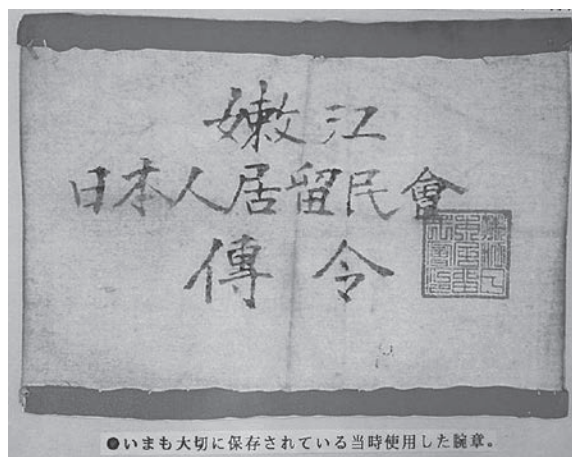


写真 14 伝令の腕章

んですけど、嫩江居留民会では、その人たちに頼んで、ここの管理事務所で、ソ連兵の相手をしてもらった。そういうのがあった。

私、考えるんですけど、小学校時代、そんな虚弱の子どもが、（伝令という）こんな大それたことをなんでできたのかと思います。よく利かん坊の子どもがおりますよね、ああいう利かん坊の子どもほど意気地がないので、出てこなかったんです。むしろ私たちのような人間がなんでこんな大役をやったのか、私は疑問に思います。だから人間の成長というのは子どもの頃の評価とまた中年の頃の評価と、大人になって社会に出てからの評価というのは、全く違ってくるように感じます。中学に入れなくて満洲に行った弱い人間がこんな大働きをなんでできたのか。私はこのことは誇りたい、そんなふうに思います。

6. 移住の動機と親の愛情

配布したものの中に、「私が満洲行きを決意するまで」という経緯がございますよね。それについてお話ししたいです。人間、いわゆる大義の下に、本当に自分の心が動くんだろうかというようなこと、私は疑問に思うことがあります。実はこれは私の父が子どもに対する、子どもの将来を考えてのことだったと私は最終的に思います。

なぜかといいますと、私の父が満洲の三河にいきなり子どもたちを連れて行ったんじゃないんです。昭和19年に移住したんですけど、その前の年の昭和18年の6月に満洲の開拓地、各地を視察に行ってるんです。一番有名な弥栄開拓団、瑞穂開拓団とか、そういう開拓団も。それから義勇隊開拓団、金剛義勇隊開拓団とか寧安義勇隊訓練所とかね（決意表明参照）。

そして最後に興安北省の三河の興安訓練所。そこに、私の兄が訓練生として入っていました。そして満蒙開拓義勇隊というのは基礎訓練3年終わるとあとは義勇隊開拓団に切り替わるんですね。一般の開拓団と義勇隊開拓団の最終的な違いは、義勇隊開拓団っていうのは武器を持った開拓団ですね。一般の開拓団は申請をすればどこの開拓団でも武器は持てたんですが、武器は持ってない。そういうふうな違いがあると思います。

それで三河の興安訓練所の藤田済さんという幹部の部屋で、ちょうど1カ月滞在して、財政面とか将来面とか、農業の状況はどうだろうか、もしあそこに行ったらどういう生活を送れるんだろうかということを非常に詳しく調べた。そして、大変な生活だな、将来的にバラ色ではない、というような非常に厳しい結論を自分で出して、山形に帰ってきたんです。

昭和18年の6月に行ったということですが、18年の4月に私、小学6年生になったんです。小学6年生になると、クラスで何人か旧制中学に進学する生徒だけを集めて特別訓練するんですね。特別訓練というのは頭の勉強じゃなく、鉄棒とかバック跳びとかの鍛錬なんです。そういう訓練を毎日、放課後したんです。私は体が弱くて鉄棒もできないし、バック跳びも怖くてできない。そういう面は全然駄目だったんです。それで私は数名の旧制中学受験生の中には選ばれなかったんです。

戦前の日本社会は、今以上に学歴社会で、中学校を出ていなかったら本当に苦勞した時代だった。そして学校に入らなかったら人並みの生活もしていけないんだろうということで、父は満洲に新天地を求めて行った。私の体が弱くて、旧制中学に進学する候補に入れなくて、そして行ったというのが、私は真相だと思っています。

それからもう一つ、今、学校給食制度というのはどこでもやっていますよね。ところが給食というのは昔は全くなくて。戦時中、確か私が小学校3年のときだと思うんですが、文部省の給食制度ができて予算も付いたんですよ。ところがその給食制度はどういうものかという、虚弱児、体が弱い人たちだけクラスから1-2人、学校で20人ぐらい集めて、その弱い子どもたちだけにやる、そういう給食制度が始まったんです。それが日本の給食制度の発端です。

虚弱児まではいかないけども、弱い子どもの中に私は入っていたんです。学校の成績はそんなに悪くはなかったんですけど。そんなことで、私の将来を考えて、満洲に行こうと思ったのかな。1年間かかって自分が実際に現地に行って、出した結論だったのかなと私は思っています。

そして、結構、家庭的に、そして経済的に恵まれた生活をしてきたんで、川柳の中に、「あの位持てば移民も巾がきき」っていうのがあると思います（『めまんべつ通信・中国発』13）。それぐらいちょっと金もあったし、ある程度の力もあった。食い詰めて行ったわけでもないんです。だから私も、帰ってきてから知り合いに、なぜ大場さん満洲に行ったの？ どうして、あんな苦勞したのかって、何回も聞かれたことでね。満洲に行った原因は、大本は、国家のためとかそういうことじゃなくて、やはり子どもの将来を考えてくれていたのかなと思いますね。

またもう一つは、ソ連と始まって強制的に集められたときに、私だけ1人、うちで寝ているように言った考えもそれに通ずると私は思っています。これは親の子に対する愛情だったのかな。当時、警察の指示に従わないで自分の子どもだけうちによけておくなんて、そんなこと見つかったら大変なことになる。それを承知の上で私を寝かせておいてくれた。私だけ生き延びさせたいという、そういうことじゃなくて、純粋な親の子に対する愛情の結果なのかなと、そんなふうに思っています。

あとがき―引き揚げの活動

以上が、大場昭蔵さんが、講演会で語った大興安嶺を越える逃避行の経緯である。大場さんは、大興安嶺越えのなかに、人間社会のすべてが凝縮されていたように思うと記している。つまり、終戦時の三河の避難行について、奇跡のように片付けられる面もあるが、それだけではなく、一つの集団が、ある条件の下で生き抜くとき、どのようなことが求められるのか、それは現代にも通用するという。指導者は指導者としての能力と責任感、そしてそれに従うものは、従う辛さにいかに耐え抜くか。そういうものがマッチして、はじめて一つの集団が困難を切り開き、生き抜くことができる。このように大場さんは語っている。

大場昭蔵さんは、戦後帰国後に、山形県立米沢興譲館高校で学び、高校卒業後、20歳で単身、北海道に渡り、釧路管内標茶町開拓農協に就職。その後、釧路と女満別の自動車学校で40年近く

指導員を務めた。

こうした仕事の傍ら、大場さんは戦後、地道に戦争体験を風化させないための活動を続けてこられた。その一つは、戦争体験・避難体験の記録化である。父上である大場卓蔵氏の日記を整理して、『日記 興安嶺を越えて』を自費出版されておられる。同書には、三河地方と開拓団、開拓団関係者名簿、収容所、地図などが資料として添付されていて、貴重な資料集となっている。なんと少しでも日記は日本に持ち帰るという強いお気持ちで日本に帰国された父上の遺志を継承される活動といえよう。

また、はがき通信である『めまんべつ通信』『しらぬい通信』『さっぽろ通信』（月1回から2回）の発行も、貴重である。もともと、女満別での単身赴任中に、ご家族への近況報告を兼ねて発行されたとのことであるが、中には、避難体験や関係者の声が反映されており、当時の状況を知る重要な資料である。

大場さんは記録を整理する過程において、文献を調べ、あるいは関係者にもインタビューを行い、研究者も脱帽のような徹底的な調査の上で記述されておられており、この点は、特筆にあたいしよう。

今一つは、戦後、三河開拓団の方々と協力しながら、犠牲者の慰霊をおこない、現地でお世話になった方々を顕彰する活動を行っていることがある。たとえば、大興安嶺を越えるときに案内役を務めたオロチョン族のトーキンボさんのことをずっと探してきた。残念ながらトーキンボさんご本人はすでに逝去されておられたものの、トーキンボさんのご長男を探しあて、感謝の気持ちを表明するために、訪中した（1995年）。

また、2001年に第二次三河友好訪問団を組織し、三河などを訪問した。この折りに、「中国人殉難者慰霊祭」を開催した。興安開拓団で働いていた中国人が、一緒に避難行に加わり、何かと助けてくれた。8月12日でのトゥラ河での牛馬百数十頭の渡河において、作業は困難を究めていたが、その中心的役割も果たしてくれていた。しかし、その後、3人が忽然と姿を消した。消息を探したところ、シウリケンで撤退中の日本軍の犠牲になっていたという。彼らに感謝の意を表明するために慰霊祭を河のふもとで行った。

また、残留孤児を育てた孫家祥さんの慰霊祭や、嫩江収容所物故者の慰霊祭も実施したほか、犠牲となった開拓団の牛馬の慰霊祭も行った。150頭ほどの牛馬のおかげで、避難行において、食いつながることができて餓死を免れたことは大きかったからである。

犠牲者の死に対して継続的に慰霊の活動を行ってこられたことに、心から敬意を表したい。

今後も、大場さんの戦争体験を後世に残すための活動に期待するとともに、一読者として『さっぽろ通信』を読ませていただけることを楽しみにしている。



写真 15 牛馬の慰霊祭

【参考文献】

大場昭蔵編『日記 興安嶺を越えて』、1975 年。

『めまんべつ通信』（1988 年 2 月～）

『しらぬか通信』（2008 年 7 月～）

『さっぽろ通信』（2019 年 8 月～）

【参考文献】（その他）

石村博子『たった独りの引き揚げ隊―10 歳の少年、満州 1000 キロを征く』、角川書店、2012 年。

川崎又三郎「大青森郷開拓団避難状況」満洲開拓史刊行会『満洲開拓史』、1966 年。

「写真・嫩江の悲劇」『秘録・大東亜戦史・満洲編（上）』、1953 年、富士書苑。

杉目昇『関東軍のオロチョン工作と興安嶺を越え退避した日本人の記録』、2003 年。

大同学院六期生回想録編集委員会『回想録 大同学院六期生』、1972 年。

中村孝二郎『原野に生きる―ある開拓者の記録―』、開拓使刊行会、1973 年。

西岡てる子「流浪に生きて」『満蒙開拓青年義勇隊嫩江大訓練所史』、嫩訓八洲会事務局、1994 年。

西原征夫『全記録ハルピン特務機関 関東軍情報部の軌跡』、毎日新聞社、1980 年。

山口正明他、編集：福満勇雄（満洲第 208 部隊向地視察隊戦友会）『大興安嶺 満洲ナラムト第 208 部隊向地視察隊戦記』、1977 年。